

震災と研究者支援ネットワークの重要性

生体システム生理学 教授 虫明 元

医学部 1号館 6階

hmushiak@med.tohoku.ac.jp

忘れもしない震災の3月11日の2時46分、私は、教授室で、包括脳夏のワークショップの仙台での開催への準備のため、関係者と打ち合わせをしていた。ここでいう包括脳とは、文部科学省科学研究費補助金で助成されている「新学術領域研究」の「生命科学系3分野支援活動（がん、ゲノム、脳）」の、さらに脳科学に関する研究者のネットワークで、私の属する東北大学の拠点では、多機能電極開発支援と光遺伝学的な研究のための光刺激装置支援を行っている。この時、私は包括脳夏のワークショップの研究集会委員長としての役割もあって、その開催のために日々奔走していた。しかし、私たちは、あの日、かつて経験したことのない大地震に襲われ、教授室の本棚なども倒壊する中、身の危険を感じて、皆で緊急避難した。その後の研究室の惨状は、ここに書ききれぬものではないが、震災後の検討の結果、予定されていた仙台でのワークショップの開催は断念せざるを得なかった。しかし、大阪大学の先生を含む全国の包括脳ネットワークのご協力もあって、神戸開催に変更となった研究集会は、日程を変更することなく無事行われ、成功裏のうちに閉幕した。

このような大震災の経験を経て、私は、包括脳のような研究者支援ネットワークの役割を強く実感することになった。すなわち、このような災害時、私たちは研究者として、教員として、人間として、様々な立場で、窮地に立たされる。その際、現場で同じ立場の人と相談することも大事だが、その場を共有し、かつ同じ困難を抱えるだけに、すぐには解決できないことも数多くある。こんな時に、遠方で直接被害の無かった仲間とすぐに相談できるネットワークがあり、それを活用できることが、どんなことよりもありがたく感じられた。そして、実際、このような支援のお陰で、今回の震災によって一旦研究教育活動等が停止せざるをえなくなっても、人的支援、物的支援、実験動物などの支援を得ることができ、すぐに復旧に取り組む体制ができた。その結果、震災後に山積する問題に対して、頼るところは支援に頼り、私たちは直面する現場の対応に専念することができたのだと思う。

今後もオールジャパンの全国規模の研究者支援ネットワークが、様々な形で準備されていれば、東日本大震災のような未曾有の危機的状況に際しても、個々の研究者が自分一人で問題を抱え込み、絶望したり苦しんだりしなくてもよい。ましてや、同じ分野の支援ネットワークであれば、研究分野に応じて必要な特別な配慮も、説明抜きで互いにすぐわかりあえ、援助しあえるだろう。

今年は昨年行うはずだった包括脳夏のワークショップを、仙台国際センターで開催できる運びとなった。これは仙台の、また東北の震災からの復興の証でもあり、また、包括脳ネットワークのお陰である、と感謝している。震災で発揮された研究者支援ネットワークが、今後も継続し、なお充実していくことを期待してやまない。